

6 宇陀の田畑と山林にまつわる 祭礼行事ゆかりの歴史的風致 はじめに

山間地にある宇陀市は、川沿いにある平地や山の斜面を整えて田畑とし、様々な作物を産出している。山がちで泥田が多く二毛作に不向きなため稲作のほか、農閑期に林業等の副業を行い、暮らしてきた。

また、冷涼な宇陀市の気候にあう作物が育てられており、中にはダリア・大和茶等、全国有数の産地と位置づけられる品目もある。

織田松山藩の『御用部屋日記』には宇陀で育てられた黒豆や葛、柿などが、江戸屋敷や嫁いだ子女へと届けられている様子が記されており、黒豆・葛・柿の栽培の歴史は江戸期まで遡る。

また、田原の片岡家文書『御尋書之覚』（宝永2年（1705））には近世以降の農村の実情がこと細かく記されており、現在も営農は続けられている。

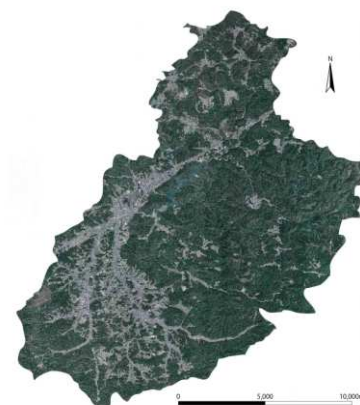
農業は天候の良し悪しが収穫量に大きく影響を与えるため、これらの作物の豊作への願いを込めて、様々な伝統行事が市内各所で現在も続いている。また、時期により必要な作業や伝統行事を表にまとめて農事暦を作り、これを目安に生活してきた。

宇陀市内には、茅葺民家や鎮守の森、山と田畑が広がる集落を舞台に続けられている農作業と、口宇陀の田原の火祭りや東山中の染田の虫送りなど、五穀豊穡への感謝や農作業により殺された虫の供養などの多彩な行事が相まって、歴史的風致を形成している場所がいくつもある。

ここでは、以下のことについて紹介する。



奈良県内の地域概念図



宇陀市の航空写真

コラム 6 庚申さん

6-2 黒大豆の生産にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム7 ダリアの生産

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
田				● 穀まき	● 荒起し ● 施肥	● 田畑	● 中耕 ● 除草	● 除草	● 草刈	● 早稲收穫	● 稲刈	● 脱穀 ● 乾燥
畑			● 馬鈴薯種付 ● 豌豆施肥 ● 麦中耕	● 甘藷採	● 大豆 ● 小麦 ● 麦中耕	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫	● 大豆收穫 ● 小麦收穫
山	炭やき、薪つくり。											炭やき、薪つくり。
副業	縄なひ。						● 茶					
行事	新月	15やがへ 初寄合 4.おこなひ(行)	2.正月(旧暦) 15やがへ 初寄合 4.おこなひ(行)	3.節句 10.山登り 21.れんが	21.二番れんが	15.友やすみ	28.夏祭	28.夏祭 16.やがへ 道志ん 7.どうまつり	28.夏祭 16.やがへ 道志ん 7.どうまつり	19.秋祭	2.山の神	10.柿領祭 報告祭

上 宮 奧 農 業 曆

上宮奥（山間部）の農事暦、昭和34年（1949）

6-1 宇陀の稲作にまつわる祭礼 行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

稲作は日本全国で行われているものだが、植え付けの時期や育て方など、地域によりやり方は異なる。宇陀市においても全域で稲作は行われているが、冒頭に触れたように、宇陀市は口宇陀と呼ばれる地域と東山中と呼ばれる区域に分かれ、稲作に関連する祭礼行事も多種多様である。ここでは、宇陀市内の稲作に関連する歴史と、宇陀市内で行われる特色ある稲作関連の行事について紹介する。

宇陀市大字^{かみかたおか}上片岡・^{しもかたおか}下片岡・田原・^{まき}牧・^{くり}栗野・^{ひがしひら}東平尾・^{おおくま}大熊で構成される旧上龍門村^{かみりゅうもんむら}の中心地で、宇陀市南部に位置する農村集落である。『和州吉野郡龍門之内田原村御検知帳』（元禄4年（1691）片岡家文書）によると上龍門全体で33町8反6畝23歩、約400石の石高が記されている。検地帳の標題にあるように長い間、吉野郡に属していたが、地理的に近く日頃の交際が密で利害を同じくするところがあるとの理由で³⁷昭和17年（1942）の町村合併を機に宇陀郡大字陀町に属するようになった。

宇陀市の農村部の殆どがそうだが、田原は周囲を山に囲まれ、わずかな平地を田畑にし、山林と田畑の境目に住まいを配置する農村風景が広がっている。稲作と山仕事は現在も続いており、稲の生育とともに季節の移ろいを感じることができる。また、村の庄屋をつとめた片岡家住宅が当時の姿をとどめたまま今も残るほか、茅葺民家が地区周辺に点在し、良好な歴史的環境が維持されている。



田原の集落



田原 平坦部



田原 山間部

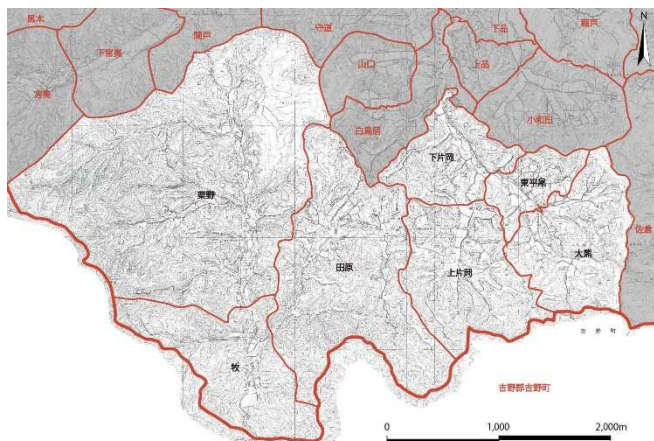


菅原神社入口

³⁷ 昭和16年（1941）11月11日付で県知事に提出された上申書には、合併の理由として「宇陀郡松山町、神戸村、政始村及上龍門村ハ地理的風俗習慣ヲ同クシ、日常の交通交際ヲ共ニシ、其ノ利害共通性ヲ有スルヲ以テ、之等町村ヲ廃シ新町設置ノ義企画シタル所、衆議纏リタルヲ以テ之カ実現ヲ期セントスルニアリ」と述べられている。



田原の位置図



旧上龍門村の区域

史料にみる過去の農業生産の概況について、田原村の庄屋を務めた片岡家に残る文書『御尋書之覚』（宝永2年（1705））によると、奈良盆地の農村と比べて田植えの時期がやや早く、播種量が9升～1斗3升／反で厚蒔きであること、自給肥料とともに金肥（購入した肥料）が投入されていること（肥料の^{かねごえ} 効は、購入にかかった代銀の額）、^{にもうさく} 二毛作率が低いことがわかる（下表）。

宝永2年（1705）田原組村々農業生産の概況

	田原村	上片岡村	下片岡村	栗野村	牧村
植付時期	4月中旬～5月節	5月節10日前～5月中10日前	4月中旬～5月中10日前	5月節6日前～5月中前	（空欄）
反当播種量	1斗2升	9升	9升	1斗3升	1斗3升
二毛作	^{かたげ} 片毛	片毛	片毛	10町11歩のうち3町5反	2町5反9畝27歩のうち8反
田方反当肥料	25 匁	39 匁程	28 匁	25 匁	30 匁
畑方反当肥料	25 匁	30 匁程	28 匁	（空欄）	18 匁

※宝永2年（1705）『御尋書之覚』（片岡家文書）より作成

また、『田原村様子書上ケ帳』（享保5年（1720）片岡家文書）によると、「男作間之^{はたらき} 持 ニハ瀧門郷³⁸ 式拾壺ヶ村之焼野山方角勝手ニ立会柴かりとり、壺里御座候松山町又ハ四里御座候桜井町へ売ニ出、渡世送り申し候（中略）女之持も作間に冬春あさ麻うミ又は綿を売買木綿少々仕候」とあり、男は山で集めた柴や薪を町場へ売りに行き、女は「麻苧^{あさお}かせ³⁹」「木綿織」で稼いだとある。近隣の村も状況は似ており、薪木や柴のほか、縄・俵・簗を作り販売をしていたようだ。

第二次世界大戦中は食料不足のため、荒れ地に大豆を撒いて育てたり、校庭の一部を芋畑や豆畑に変えたり、食糧増産体制に入っていた。

戦後は、サラリーマンとして勤めに出る兼業農家が大部分を占め、農作業の機

³⁸ 本来は「龍門郷」であると考えられるが、原文に従い表記した。

³⁹ 奈良晒^{ならさらし}の工程のひとつ、原料の青苧^{あおそ}から麻糸を紡ぐ仕事。青苧は東北地方が主産地で、発注元から供給された。「かせ」は「稼ぎ」のこと。

械化も進み、江戸期から比べると稲作や、稲作にまつわる行事の様相は大きく変わったが、生産領域としての田畑と山林の営みは連綿と受け継がれている。

伝統行事については、菅原神社の秋祭り（火祭り）を中心に据え、道づくりをはじめとした行事（下表）、組によっては庚申講が現在も続いている。

田原区年間恒例行事・祭事一覧表

No.	行事・祭事名	実施日	主催
1	初集会	1月4日以降最初の日曜	区
2	とんど	成人の日	当屋垣内
3	春の道づくり	3月の第3日曜	区
4	田休み・日待ち講	田植え終了期	区
5	墓山草刈り	6月・8月の最初の日曜	区
6	金毘羅祭	9月第2土曜	当番垣内
7	観音会式	9月第3日曜	当番垣内
8	秋の道づくり	9月第3日曜	区
9	無縁仏法要	9月24日	当番垣内
10	秋祭り	10月第4日曜	氏子・区

=用語説明=

区＝田原の全世帯。区は谷ごとに6組にわかれ、1～3組が上垣内、4～6組が下垣内に属する。

当屋垣内＝秋祭りの差配を担当するトウヤが属する組。

当番垣内＝行事を担当する組。輪番制で年により変わる。（例：R2年度の日待ちは2組、金毘羅祭は3組、観音会式は4組）2005年、当屋に仕事が集まらないよう制度を変えた。

氏子＝菅原神社の氏子。区外に暮らす出氏子も含む。

一方で、奈良盆地の呼称「^{くんなか}国中」に対し、「^{ひがしさんちゅう}東山中（^{ひがしさんない}東山内ともいう）」と呼ばれる地域に属する室生染田は、宇陀市の北西部に位置し、奈良市と接する山間部の集落である。興福寺の荘園、福島ノ庄（多田、染田）に属していた。

中世には国衆の多田氏が治めていたが、近世には藤堂藩領だった時期がある。明治21年（1888）に周辺の村と合併して東里村となり、昭和30年（1955）に室生村に編入された。

いくつかの谷筋に棚田が広がり、山と田の境に家を配する田園風景が広がる集落では主に稲作を中心とした作物が育てられているほか、茶畑が散見される。

行事の柱は10月の秋祭りだが、1月のだんじゅう、^{けっちゃん}結鎮、などの特色のある伝統行事が染田周辺には数多く残っており（下表）、その殆どが稲作に関連する行事となっている。

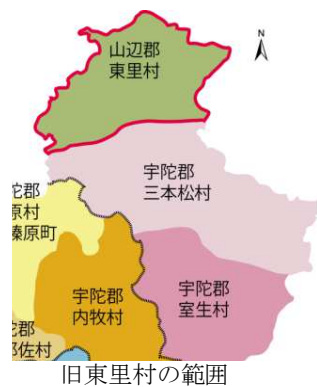


宇陀市における染田の位置図

表 染田の年中行事

日時	行事名	備考
1月1日	歳旦祭	
1月4日	だんじゅう(ランジョウ)	牛玉法印、漆の枝の飾りを作る
1月10日	結鎮(鬼の目玉打ち)	竹と柳の飾りを作る、四方天地を矢で射る
1月15日	とんど	正月飾りや関連行事の飾りを集めて焼く
2月3日	節分	豆まき
2月11日	祈年祭	
4月3日	節分	菱餅を供える
5月10日	けがけこもり	屋こもり
6月5日	節分	ヨモギと菖蒲の軒飾り、チマキの御供
6月16日	田の虫送り	農作業で殺めてしまう虫の供養
7月10日	夏祭り「夏かぐら」	
7月24日	地蔵会式	
8月20日	天神会式(お茶こもり)	
8月20日頃の日曜日	風の祈禱	
10月17日に近い日曜日	秋祭り	このときに総代が交代
10月31日	つごもりこもり	神送り
11月10日	金毘羅さん	
11月23日	新嘗祭	
12月31日	年越し参り	

このほか、毎月1日に朔幣(さへい)を開催する。



染田の集落（青木宅裏 山の神より俯瞰）

代表的な集落の年間行事について紹介したが、これらの集落以外にも、良好な歴史的環境を持つ農村集落は多数存在し、稲作に関連する特色ある祭礼行事が広範囲にわたって残っている。

（２）建造物

【興隆寺庫裏】

木造平屋建、切妻、棧瓦葺、平入。大宇陀宮奥にあり、明治 7 年（1874）に廃寺となったが、鐘楼・庫裏や仏像等は残り、以来地域で守ってきた。

昭和 46 年（1971）5 月に大宇陀町が撮影した航空写真では、現在と同位置に同規模の建物があり（当時は茅葺だったがのちに棧瓦に葺きかえたとみられる）、柱などの材が相応に古いことからそのころ既に建てられていたことがわかる。

集落の中でも高台にあり、境内から集落全体を見渡すことができる。年明け最初の日曜日に、集落の人が集まり、ここの境内で集落の境界に張るカンジョウ縄を作り、厄除け祈願を行っている。



興隆寺庫裏



昭和 46 年（1971）の航空写真

【興隆寺鐘楼】

木造平屋建、切妻、棧瓦葺、妻入。昭和 46 年（1971）5 月に大宇陀町が撮影した航空写真では、現在と同位置に同規模の建物があり、柱などの材が相応に古いことから、この頃には既に建てられていたことがわかる。庫裏の南西に配され、完成したカンジョウ縄の厄除けの祈願をする際、法螺貝の音とともに、この鐘の音を周辺に響かせている。



興隆寺鐘楼

【染田春日神社拝殿】

染田春日神社は、室生染田集落の中央部に位置し、集落で行われる年中行事のおもな舞台となる。

『大和国山辺郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）※昭和 19 年（1944）まで追記あり）によると由緒不明であるが、明治 12 年（1879）には現在の場所に境内地があった。鳥居の奥に拝殿、その奥に本殿を配している。そのほか、境内社や天神講連歌堂、十輪寺本堂が同じ境内に並んで建っており、境内の隅に石仏が鎮座する。

本殿は一間社春日造、銅板葺で柱や細部彫刻、壁板に彩色が施されている。建立年代は不明。

拝殿は木造、入母屋造、棧瓦葺、平入。『大和国山辺郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）※昭和 19 年（1944）まで追記あり）によると明治 45 年（1912）に改築の届出をしており、桁行 3 間、梁間 1 間 2 尺の規模に改築している。現在の拝殿と同規模で柱材など相応に古いことから、このころの建築とみられる。



染田春日神社本殿



染田春日神社拝殿

【天神講連歌堂】県指定文化財（有形民俗）

木造平屋建、入母屋造茅葺、妻入り。国衆多田順実が南北朝時代に天神御影を感得し、居館近くの染田に祀ったのが始まりとされる。現在の建物は、春日神社本殿の西に隣接して建っており、18 世紀中頃のものとして推定される（奈良県の指定説明による）。結鎮などの行事の際には、ほかの末社同様にお供えが置かれる。

連歌会を催す際に、この建物が使われる。



染田天神連歌堂

【十輪寺本堂】

木造仏堂、入母屋造庇付、トタン葺。方 3 間の仏堂で、創建時期は不明だが、昭和 38 年（1963）に撮影された航空写真（国土地理院が公開している）に同位置に同規模の建物があり、柱などの材も相応に古いことから、そのころには既に建っていたことがわかる。

だんじゅう、結鎮など集落の行事の舞台となってい



十輪寺本殿

る。室内は畳敷で、床の間のようなところに厨子が置かれ、地蔵尊と十一面観音菩薩像、不動明王像が納められている。

【水分神社本殿】県指定文化財（建造物）

木造一間社隅木入春日造、檜皮葺の社殿を 3 棟、並列で西面させて覆い屋に納めている。棟札によると貞享 4 年（1687）の建立とされ、平尾のオンダ祭の会場となる。

水分神社本殿



白山神社本殿

【白山神社本殿】

木造一間社春日造、銅板葺。高台にある境内から集落全体が見渡せる。奥の階段を登ると、瑞垣で囲まれた中に本殿がある。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和 34 年（1959））に掲載された写真と同規模の社殿が現在も同じ位置にあり、材が相応に古いことから昭和 34 年（1959）以前から存在するものと推察できる。野依のオンダ祭りの会場となるほか、後述の「黒豆神事」の舞台にもなる。



昭和 34 年の白山神社
（『大宇陀町史』より）

【下笠間の阿弥陀磨崖仏】市指定史跡

石造磨崖仏。下笠間と山添村との村境にある。阿弥陀像の右脇に「永仁二年甲午 五月一日 願主正証」とあることから、永仁 2 年（1294）に作られたことがわかる。虫送りの際には、この場所が終着点になっており、広場に松明を積み上げ、全員で般若心経を唱えて解散する。



下笠間の阿弥陀磨崖仏

【片岡家について】

片岡家は江戸時代に庄屋、大庄屋、^{ねんよ}年預の役を務め、相当の格式を認められた地主農家である。中世から近代にわたり、約 13,000 点にのぼる文書が代々伝わることで知られる。（文書は平成 29 年（2017）県指定文化財（古文書）に指定された。）

片岡家住宅は宇陀から吉野へ抜ける道から少し東へ上った場所の、集落のほぼ中央にある高台に建つ。櫓の巨木と石垣がひととき目を引く。

部分的な改造はあるものの、当初の姿をよく残す建物であること、それぞれの建物の建設年代が明らかで、間取りや構造手法に特色があり、民家の歴史を知る基準のひとつとして貴重であることから、主屋（居室部）（客室部）、表門がそれぞれ国の重要文化財（建造物）に指定されている。

【片岡家住宅主屋（居室部）】重要文化財（建造物）

桁行 14.9m、梁間 13m、入母屋造、茅葺、両側面及び背面庇付、棧瓦葺き。上棟式の槌（自宅にて保管）によると寛文 10 年（1670）に建築された農家住宅。昭和 36 年（1961）3 月 23 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。大宇陀田原の火祭りや庚申さんの行事など、トウヤが巡ってくると組の者が集まり祭りの準備作業やお参りの場として使われる。



片岡家住宅全景



片岡家住宅長屋門より



片岡家住宅主屋（客室部）

【片岡家住宅主屋（客室部）】重要文化財（建造物）

桁行 9.2m、梁間 5m、入母屋造、茅葺、南面及び西面庇付、東面玄関の間付属、棧瓦葺き。『玄関御普請覚帳』によると、天明 2 年（1782）に式台とともに建築された。居室部とともに昭和 36 年（1961）3 月 23 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。



片岡家住宅表門

菱形欄間など特徴的な細部意匠を持つ座敷で、領主や代官等が来臨した際に、休息を取るため使われていた。

【片岡家住宅表門】重要文化財（建造物）

『門長屋棟上御祝儀覚え帳』によると、天保 3 年（1832）片岡家の門として建てられた。中塗土仕上げの壁で、外側の開口部が少ない。桁行 16m、梁間 4m、切妻造、棧瓦葺き。昭和 55 年（1980）1 月 26 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。

【菅原神社石灯籠】

田原の氏神である菅原神社は、集落の中心部を東西に走る県道の北側に位置しており、小高い丘の一部を整えて確保した平地に、社殿と拝殿がある。

主祭神は菅原道真とされているが、『菅原神社縁起』（年代・筆者不詳）には菅原道真と直接的な関りは見いだせないという。

神社の名称も、「無年貢山天神社」（『田原村社寺改報告書』元禄6年(1639)、片岡家文書）、「氏神天満宮社」（『寺社御取調二付書上帳』明治5年4月、片岡家文書）、「村社菅原神社」（『大和国宇陀郡神社明細帳』明治12年(1879)）と、一様でない。神社の来歴は定かでないが、貞享2年(1685)と天明7年(1787)に寄進された石灯籠が現存することから、江戸時代前期には既にあったと考えられている。火祭りとして知られる秋祭りの主会場で、宵宮のクライマックスを飾る御供まきは、この場所で行われる。



菅原神社



天明7年(1787)
の銘がある灯籠

(3) 活動

【綱掛神事・カンジョウ縄（道切り）】

疫病やそのほかのよくないものが村に入ってくるのを防ぐため行う呪術のひとつに、「道切り」がある。宇陀ではこれを「縄掛け」「カンジョウ縄」と呼び、正月に集落の入口付近に縄を張る。

大宇陀の西端、宮奥のカンジョウ縄は『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年(1959)）268頁に写真が掲載されており、行事は現在も続いている。

1月最初の日曜日早朝から、集落の人が興隆寺に集まり、寺の軒先でカンジョウ縄を作る。男性が大綱を、女性は綱に吊る飾りを作る。

大綱は、大人の両手を広げた幅を1^{ひろ}広として通常は12広、うるう年には13広の長さに仕立てる。縄に吊る飾りも通常は12個、うるう年には13個つくり均等に割り付ける。



『大宇陀町史』より



厄除け祈願の様子



カンジョウ縄近景

縄が仕上がると、厄除けの祈禱を行う。般若心經を唱えたあと、法螺貝と鐘の音とともに松の机を櫓の棒（昔は漆の棒だったが、かぶれるので櫓に変えた）で叩く。この所作を2回繰り返す。櫓の枝が割れ、大きな音が出るほど良いとされる。

厄除け祈禱が終わったら、縄を集落の所定の場所へ掛けに行く。翌年までの1年間、その場所に存置する。役目を終えて外した縄は、焚火で燃やされる。

なお、カンジョウ縄は市内では室生深野、室生上笠間、榛原額井、榛原戒場で現在も確認できる。

かつてカンジョウ縄が行われていたところをカンジョウと呼ぶなど、地名のみが残るところもある。正月行事のオコナイ（新年の祈禱）とあわせて行われている。次のランジョウ・結鎮^{けいちん}などとともに、村の一年間の豊作祈願・村内安全を村人が祈る古風で素朴な行事である。

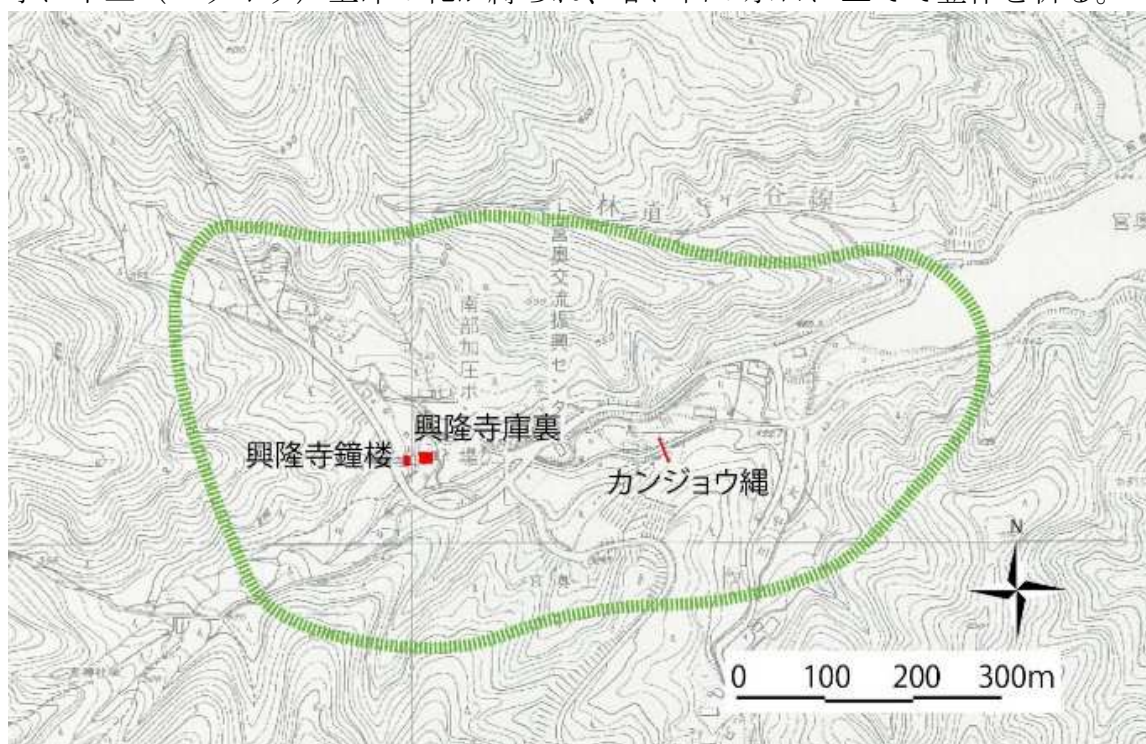
これらのオコナイは榛原地区では長峯・戒場・佛隆寺、室生地区では染田・多田・深野・下笠間（上笠間）、三本松・長瀬・元三などで行われている。この行事に牛玉（ゴウオウ）宝印の札が縛られ、春に田の水口に立てて豊作を祈る。



室生深野



榛原額井



上宮奥のカンジョウ縄にまつわる歴史的風致

【だんじゅう（ランジョウ）】

五穀豊穰と健康長寿を願い、開催される行事。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））には「オコナイ 呼び名、行われる日、行事の内容などは集落ごとに違っているが、内容の点では同じものである。（中略）染田・多田・深野と旧三本松の中村・長瀬・琴引・元三と、現在は廃絶した上笠間・小原・滝尾・滝谷がある」と記され、このころには行われていたことがわかる。

染田では「だんじゅう」と呼び、毎年1月4日、午後2時から室生染田にある春日神社の社務所に集まり、お札と寿命帳を用意する。寿命帳とは、だんじゅうで奉納するお供えの目録と、その年の氏子総代（4名）の名前、各世帯で最も年長者の名前と年少者の名前が記されている。東の垣内と西の垣内で1冊ずつ用意する。

お札は、「十輪寺 牛の玉 宝の印」と書かれ、朱印が押される。朱印には明治年間の墨書が残る。

次に、みと（田の取水口）に立てる漆の棒の飾り（牛玉棒という。）を作る作業を行う。集落の世帯数分の漆の棒を山から集め、50 cmほどの長さに切り揃え、割る部分だけ皮を剥く。工具で三つ又の割れ目を入れ、細く折ったお札を挟む。用意した棒に全てお札を挟み、片付けて直会をする。

ひと段落したところで、牛玉棒を十輪寺本堂へ移し全員で般若心経を読誦する。読誦が終わると、本堂前に出された木の台の前に藤の枝を両手に持って何人かが座り、最も若い氏子総代が酒を持って靴を履く。

しばらくすると、「ランジョウ」という掛け声で藤の枝で木の台を叩き始め、その音とともに総代は酒を持って、集落の中ほどにある山の神まで走る。祠の前で一礼して酒を撒き、走って十輪寺へと帰る。総代が帰ってくるまで、本堂に残る人は木の板を叩き続けている。

総代が戻ると、本堂内でサイコロ状に小さく刻まれた餅の切子が撒かれ、参加者はそれを拾う。本堂に供えられていた漆の棒は、希望する氏子に配布され、3



寿命帳



お札に朱印を押す



朱印の墨書



枝の先を割る



直会、三種と酒

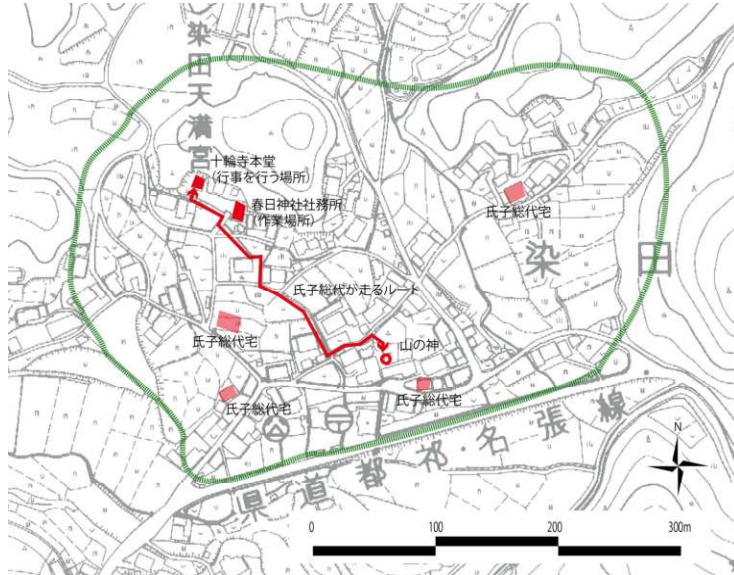


般若心経読誦



ランジョウの掛け声とともに、総代出発

月中旬にみとに飾られる。(現在はみと祭りをを行う家がないため、5月の植え初めのときに、田の端に挿すようになった。)



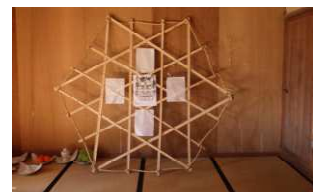
だんじゅうで氏子総代が参拝する山の神の位置



山の神参拝風景



配布する餅の切り



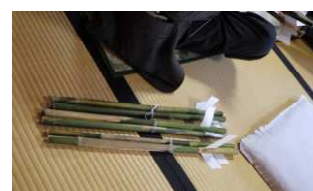
的は役員が用意



令和3年の鬼は上出来



竹を割り、紙を挟む



矢の形にし、束ねる

【結鎮^{けいちん}（鬼の目玉打ち）・植え初め】

結鎮は五穀豊穡と悪疫退散を願い、開催される行事。

『室生の民俗』(松本俊吉ほか/昭和41年(1966))によると「オニノメノタマウチと呼んでいる染田では、十日の午後四時から大当屋が導師になり(以下略)」とあり、このころには行われていたことがわかる。現在は1月10日午後2時に染田の春日神社の社務所に集まり、最初に水口に飾る竹と柳を氏子たちで作る。

竹を割り、紙を通して矢の形にする。長い矢を7本、短い矢は2本を紙^{こよ}縊りで束ねて集落の世帯分用意する。

次に、柳の枝を2本、藁で束ね、これも集落の世帯分用意する。竹と柳の作業が終わったら、3種と酒で直会をする。

ひと段落したら十輪寺本堂へ移動し、事前に役員が作っておいた的を出す。竹と柳の飾りとお供え物を的の前に並べ、参加者全員で般若心経を読誦する。

読誦が終わったら、長い竹の矢を出し、弓に^{つが}番えて東西南北と天地、最後に鬼の目に向けて射る。射た矢

は拾い集められ、鬼の的とともに翌日のとんどで焼却される。また、竹と柳の飾りは希望する世帯に配られ、5月の植え初めの際に、田の端に立てられる。残った飾りは、本堂の縁の下に保管される。



柳を藁で束ねる



三種で直会



祭壇まわりの様子



般若心経読誦



まずは東へ



次は西→南→北



天→地→鬼の的



鬼の的に射る



残った飾りは本堂の縁の下に保管

植え初めは、かつては3月の社日（春分・秋分に最も近い戌の日のこと）に、みとに竹の矢（結鎮で作ったもの）を立てる「みと祭り」という風習があった。近年は農協で苗を購入するところが殆どで粃まきをしないので、この風習を行った田は令和3年（2021）時には確認できなかった。

ただし、田植えを始めるときに行う風習、「植え初め」は残っている。田の隅に花と柳の枝（結鎮で作ったもの）・牛玉杖（だんじゅうで作った漆の棒の先端に牛玉宝印を押した札を挟んだもの）を挿し、おかきなどの



フキ俵を作る



お盆にお供えを置く

お菓子を一升枡に入れて^{ふきだわら}蒚俵⁴⁰を供えて「令和3年の豊作を祈ります」と唱えながら手を合わせ、まず12本の苗を植える。次に植えた苗のところに青い茅（ススキ）を挿す。これは、茅のように苗が大きく丈夫に育つようにとの願いが込められている。

田に挿した枝や花は、そのまま残しておき、お供えはお下がりとして植え初めのお祈りのあとに頂く。

ここ数年は、花とお供えを省略し、田の隅に柳の枝・牛玉杖を挿すのみの家がいくつか見られる。また、みと祭りがないため、植え初めのときに柳や牛玉杖と一緒に、竹の矢も田の隅に挿している。

集落内を歩いていると、山あいの僅かな平地に水を湛えた水田が広がる。植えて間もない苗は丈が低いので、田の隅に挿された枝はひときわ目を引く。



フキ俵を作る



お盆にお供えを置く



お供えをして合掌



稲を植えて茅を挿す



枝や花は挿したまま



別の田の植え初め

⁴⁰ 蒚俵は、大和高原や伊賀地方の田植えの時期に作られるもので、煎り大豆と塩で炊いたご飯をおにぎりにして軸のついた蒚の葉に包み、蒚の筋や藁で先端を結んで俵状にしたもの。染田は生米のまま包む。

【平尾のオンダ祭り・野依のオンダ祭り】

いずれも県指定文化財（無形民俗）

オンダ祭りは、田づくりの所作を模擬的に行うことで、その年の豊作を願う神事で、宇陀市では大宇陀平尾と大宇陀野依のオンダがよく知られている。

平尾は1月18日の夜、平尾水分神社の本殿前に舞台を設け、集落の東と西それぞれから一人ずつ選ばれた大頭と小頭を中心に、白装束を纏った「ショトメ」と呼ばれる子供たちが田植えの一連の所作を演じる。そのあと小頭に抱えられて「若宮さん」と呼ばれる翁面を付け全身にたくさんの紙縋りが結ばれた人形が登場する。自分の体の調子が悪い場所と同じところに結ばれた紙縋りを貰い受けると、その場所が良くなるといわれている。

弘化2年（1845）正月の御田植本（『高岡宗三郎家文書』）に御田の唄と次第が記されており、現在も同じ内容でオンダ祭りは行われている。



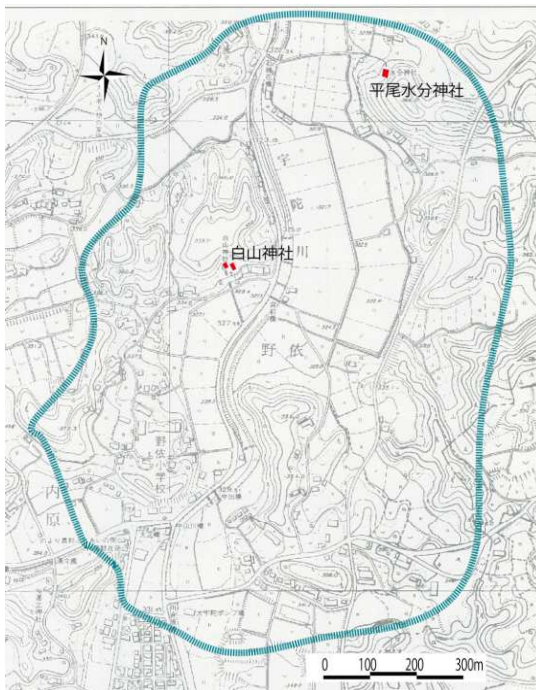
平尾のオンダ祭り



若宮様登場



野依のオンダ祭り



平尾・野依のオンダに関する歴史的風致

平尾の西に隣接する大宇陀野依では、5月5日にオンダ祭を行う。この日は神様の田植えの日のため、野依の住民は田植えをしてはいけないと言われている。集落のほぼ中央に位置する野依白山神社境内で祭りが行われ、大頭・小頭・荒鋤・万鋤・小鋤・苗籠・植女・ケンズイ配り・囃子方が、境内の各所で歌を歌いながら順番に所作や舞を繰り広げる。かつて祭の日は、女性の休息日であるとされていたことから、舞を踊る植女の役も男性である点がこの祭りの大きな特徴である。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年（1959））によると、大正時代までは旧暦5月5日に行われていたが、のちに新暦5月5日に改めたとある。

【田の虫送り（下笠間）】

虫送りは、虫オクリ（松明を掲げて集落内を歩き祈禱札を依代^{よりしろ}に悪霊・害虫を集落外へ送り出す）と虫祈禱（集落のはずれに祈禱札を立て、害虫退散を祈願する）のふたつの行事がひとつになって行われている。

日取りは6月20日前後に行われるところが多い。
『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））
には、「室生村で今なお行事を盛大に続けているのは、上笠間（田部・下出・上出）・下笠間・多田・小原・染田・東無山（以下略）」とあり、このころには行われていたことがわかる。

現在は、多田・染田・小原・上笠間・下笠間の順に、西の大字から東の大字へと、1日ずつ日程をずらして実施している。令和3年（2021）の下笠間の虫送りは6月20日に実施された。

18時45分に各家庭から松明（各家庭で自作）を手に持った人が集まり始め、19時に虫供養のお札を掲げた住職を先頭にして、集合場所の三差路を出発。ドーン・ドーン・ドンドドドン、と鳴る太鼓に続き、同じリズムで法螺貝を吹き、住職の鈴の音が続く。

各戸の家長が松明に火をつけ、東へ向かって進みだすと、ほかの家族もそのうしろをついて歩く。

田んぼの間を抜け、笠間川沿いに山裾を15分ほど歩くと市境に到着し、下笠間の阿弥陀磨崖仏付近の広場に松明を積み、虫供養の祈禱札を立てる。全員で般若心経を唱えて合掌、三差路に戻り解散する。



三差路に集合し、松明に点火する。



住職が掲げて歩く虫供養のお札



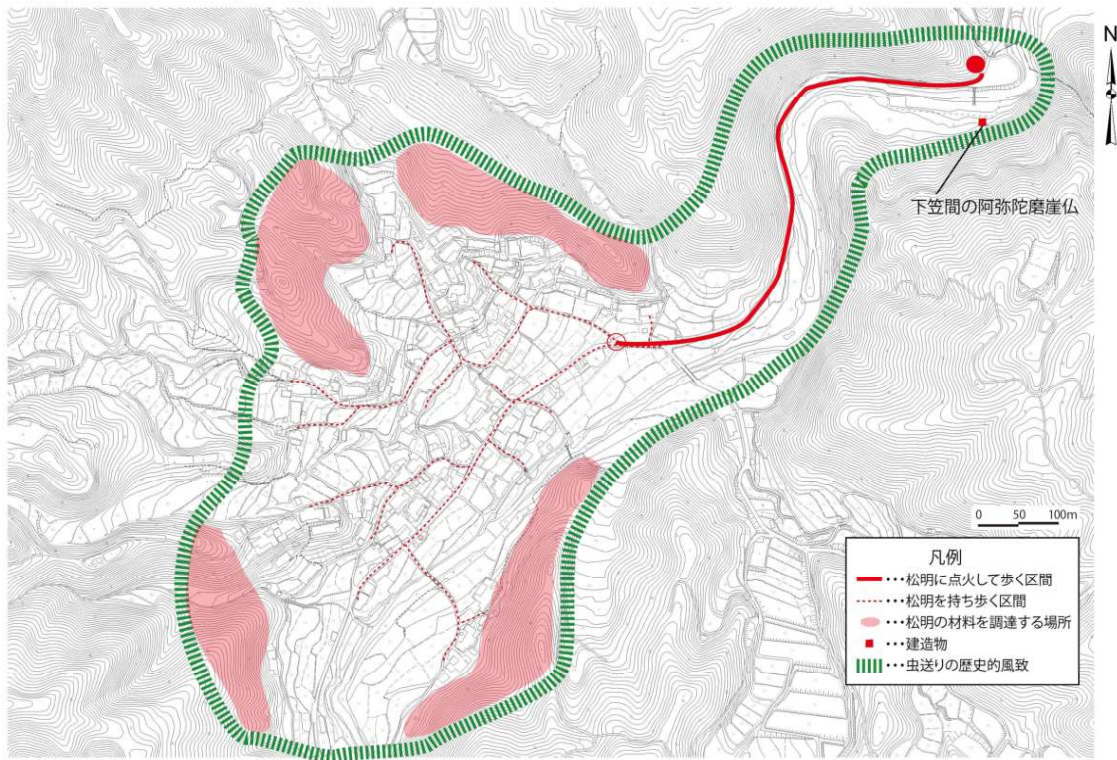
順番に火をつける



夏至が近いので夜でもまだ明るい



松明を積み、読経。



下笠間の虫送りのルート

【菅原神社秋祭り（通称：田原の火祭り）】

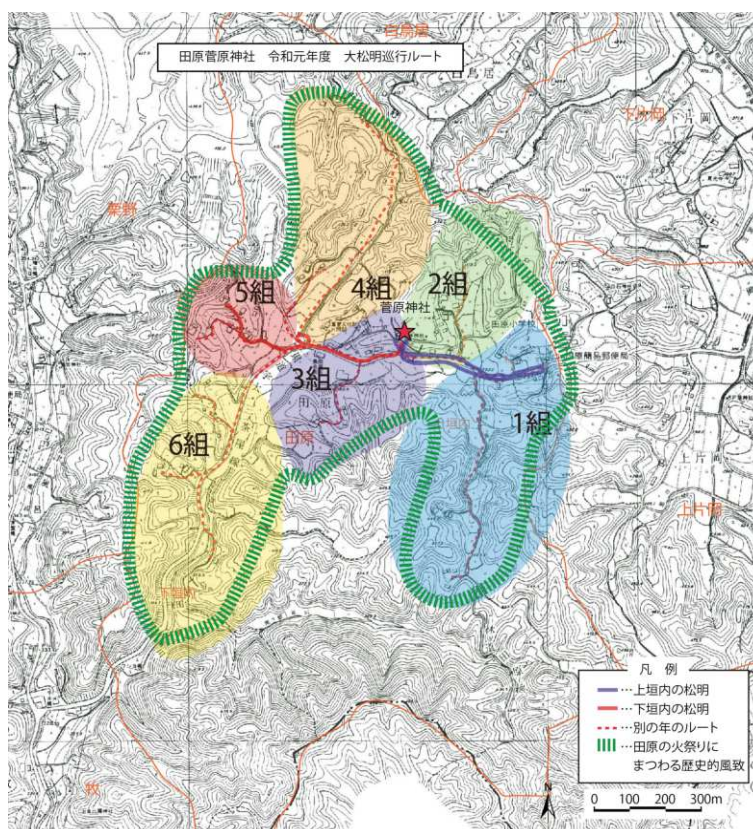
大宇陀田原の火まつりは、一年の豊作に感謝を捧げる秋祭りの宵宮に行われる行事で、10月の第4日曜日の夜に行われる。『大和国吉野郡田原村誌』（明治15年（1882））には、「式外村社菅原神社（中略）祭日九月廿四日」と紹介されており、現在は月遅れでの開催となっている。

田原の垣内は6つの組に分かれ、1～3組を上（上の区、上の部、上之組ともいう）、4組～6組を下（下の区、下の部、下の組ともいう）としている。秋祭りの責任者となる当屋は、上と下から1名ずつ選出する。

翌年当屋を務める者を相当屋と呼び、当屋も相当屋も垣内の家々が輪番で務めている。祭典は宇太水分神社の神職が務める。

火まつり当日は早朝から集会所に集まり、垣内の者が総出で御供を搗く。10時に「手祝い」と称して休憩がとられ、「手祝い餅」（あんころ餅）が振舞われる。

休憩後は、残りの御供を搗く班、上の当屋宅へ大松明を作りに行く班、下の当屋へ大松明を作りに行く班、神社の清掃に向かう班、の4班にわかれて火まつりの準備を行う。作業は概ね12時過ぎに終了させ、集会所で祝宴となる。



(燈登りのルートと上垣内・下垣内の範囲)



集会所の御供つき



手祝い餅



大松明製作中

2 時間程度で祝宴は終わり、^{とうやがいと}当屋垣内（当屋がいる組）以外の人は帰宅する。当屋垣内の人^{とのぼ}は御供餅の粉をふるい、これの一部を神社に持っていく。この作業を「御供あげ」と言い、ここまで終われば、当屋垣内の人^{とのぼ}も帰宅する。

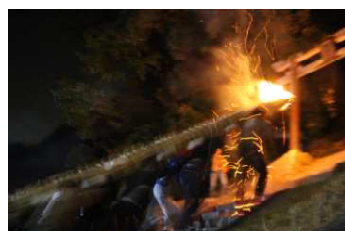
暗くなると、燈登りが始まる。上の当屋、下の当屋でそれぞれ 1 本ずつ大松明があり、村の若い者がこれを担いで集落内を練り歩く。

神社から遠い方の当屋宅を 19 時に大松明が出発する。「ヨイト、カイト」の掛け声とともに大松明が進み、そのうしろに御供桶、高張提灯、提灯を下げた参列者が続く。

一通り集落内を練り歩いた大松明は、最後に菅原神社前にて合流し、掛け声とともに急な階段を一気に駆け上がる。境内に上がった大松明は、御供まきが終わるまで本殿の左右に立てられる。



集落内を練り歩く松明



階段を駆ける大松明



境内に立てた大松明

尚、大松明が練り歩くルートは年によって異なる。理由は、上・下それぞれその年の当屋宅から出発し、ほぼまっすぐ菅原神社を目指すためである。長距離を歩くと大松明が燃え尽きるため、神社から遠い家が当屋になると、その年は自然と急ぎ足になる。十数年ほどで当屋は一巡し、大松明の出発点が集落内のほぼ全ての家を巡ったことになる。

続いて神事が行われ、お祓い、^{はら}献饌、^{けんせん}祝詞、^{のりと}玉串奉納、当屋の引継ぎ（トワタシと言い、上の当屋が用意した小豆ご飯を当屋・相当屋の順に取り分け食べる儀式を行う）、撤饌にて終了する。この祭典は3名の氏子総代により取り仕切られる。

神事が終わると御供撒きが始まる。上下の当屋と相当屋が神社本殿の玉垣の上から御供を撒く。普通の大きさの御供の合間に投げられる「カサゴク」と呼ばれる薄い大きな御供餅は争奪戦になり場が盛り上がる。21 時頃には大松明が倒され、火を消し、一連の行事は終了となる。（大松明の燃えかす拾いや大松明の処理、祝宴の後片付けは翌日、上下の当屋がする。）

片付けの翌日、菅原神社の分霊屋形「オスヤ」の引継ぎが行われる。「オスヤ」は、木箱のなかにお社が作られ、正面にしめ縄を飾ったものである。当屋の任期中に当屋宅で預かり、床の間に祀られる。当屋は、毎日神社へ行くかわりに自宅に祀られた「オスヤ」へ^{しきみ}檜や洗い米などを供え、参拝する。

新任の当屋（元相当屋）が前任の当屋宅に「オスヤ」を受け取りに行く。「オスヤ」を受け取ったときから1年間、当屋の仕事にあたる。

前任の当屋宅には冷酒と簡単な肴が用意され、元当屋から「一年間、よろしくお願いします。」と言い、新当屋（元相当屋）は「承りました。」と答えてオスヤを受け取る。新当屋は受け取ったオスヤに息がかからないようにするため、口には榊の葉を1枚くわえて家まで一言も喋らずに帰る。今は車で移動するが、昔は徒歩で受け取りに行った。提灯や法被など火祭りで使う用具も全て引継ぎ、いずれも当屋宅で保管される。



御供まき風景



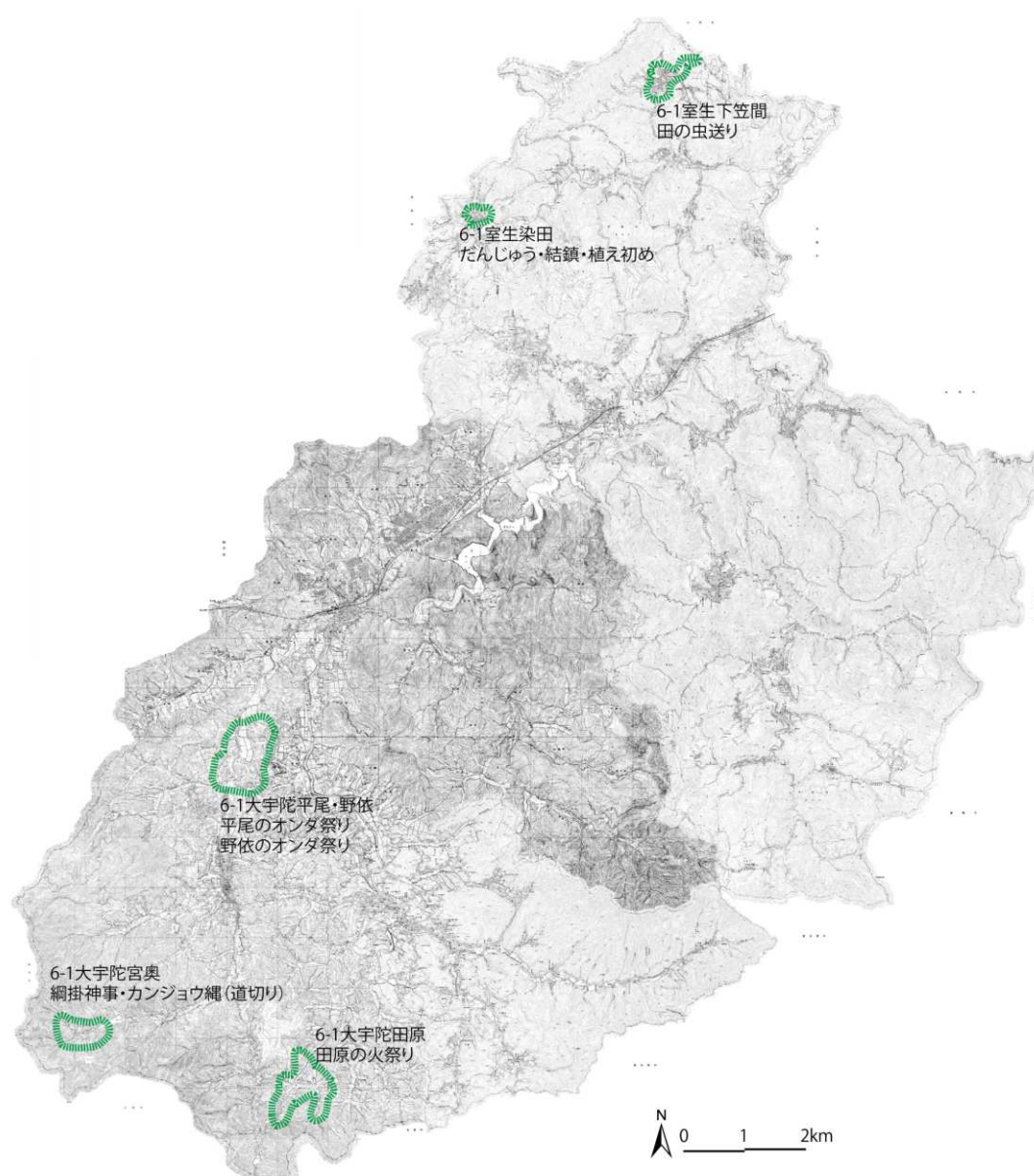
倒した松明



床の間に安置されたオスヤ

(4) おわりに

ここでは、宇陀市で稲作を行う農村集落に残る祭礼行事を挙げた。現在でも、宇陀市内では茅葺の民家や鎮守の森など、昔ながらの農村集落の環境を舞台に米作りは続いている。また、田原の火祭りや染田の虫送りなど、稲作にまつわる伝統的な風習が地域の人々に受け継がれている。こうした良好な歴史的環境と、古くから伝わる風習が相まって、稲作にまつわる歴史的風致が形成されている。



宇陀市の稲作に関する歴史的風致の図

コラム5 フクマルと、とんど（どんど）

フクマルは、大晦日に行われる行事で、竹を組んで周囲に藁束を重ね、各世帯からお供え（藁のお飾りと葉の上に乗せた米）と松明を持ちより、全世帯が揃ったところで藁に火をつけて燃やす。燃え残った火はまた松明に移して家に持ち帰る。室生三本松、室生砥取などで行われている。

とんど（地域により「どんど」と呼ぶところもある）は、小正月の行事のひとつで、1月15日前後に行われる。フクマル同様、竹を組み周囲に藁束を重ね、お正月に家で飾ったしめ縄や書き初めも一緒に燃やす。

市内の大半の地域に残っており、恵方から点火する、など地域により決まった作法がある。^{おきび}熾火（火が燃えたあと、炭が赤くなった状態）で餅を焼くのは共通しており、竹の先に餅を刺して焼くところもあれば、餅焼き網を竹の先に固定したり、網を吊るなどの工夫がみられる。熾火を持ち帰り雑煮や汁粉をこしらえる家もかつてはあった。この一年の健康を祈り、皆で餅を食べるのである。

農村部では、田の中央で大々的に燃やしているが、木造家屋が密集する町場では、公園や神社の境内、川の中州などに小さな山を作り、火の強さを調整しながら、とんどをする。

下笠間では、大人が作るとんどのほかに、こどもだけでつくとんどがある。



町場のとんどの様子



フクマルのお供え



三本松のフクマル、点火前の様子



榛原母里のとんど、点火前の様子



熾火で餅を焼く様子

コラム6 ^{こうしん} 庚申さん

庚申さんとは、^{じっかん}十干と^{じゅうにし}十二支を組み合わせた暦法の 60 日ごとに巡ってくる庚申の夜に、^{さんし}三尸という虫が睡眠中に体を抜け出て天帝にその罪を報告するため命を奪われるという信仰に関連する行事である。

健康長寿を願い、虫が体から出て行かぬよう、組に属する各世帯主が庚申さんの所に集まり般若心経を唱えたあと、当番の家に集まって宴席を囲み、日が変わるまで寝ずに過ごす。

『上龍門村風俗誌』（大正 4 年（1915）/上龍門村）によると、「庚申 当日ハ精進料理ニテ油揚・小豆飯ヲ食ヒ、且ツ寒ニ作りシ寒粉餅作り庚申ニ供ス」とある。

庚申講は、宇陀においては農村部に比較的好く残っている行事で、庚申さんの石碑を建てて祀るほか、庚申の夜は当番宅の床の間に庚申さんの掛け軸を飾り、飲食を共にするのが殆どだが、中には閏月に小旅行をする組もある。次第に簡略化されて、22 時には解散する、時間帯を変えて日中に宴席を持つなど、参加しやすいように工夫しながら継続している。



4 組の庚申



1 組の庚申



6 組の庚申



5 組の庚申



庚申の掛け軸（榛原長峯）



庚申講の様子（榛原長峯）

6-2 黒大豆の生産にまつわる 祭礼行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

宇陀市では田の法面や畑地を利用し、豆類の栽培をする農家が多く、白大豆の「宇陀大豆」、小豆「宇陀大納言」等が現在でも生産されている。近年、精力的に生産されているのが「黒大豆（通称「黒豆」）」だが、その歴史は古く『宇陀松山藩御用部屋日記』天和元年（1681）3月8日の段に、

“京へ津川様よりおいし様為御見廻御飛脚小者一人遣ス

そは粉八升五袋ニ

丹とう酒一升五合壺樽ニ入

右之便ニ助進方より申来候品々上ス覚

黒大豆貳升 自然薯蕷一かご

午房三は 志ゐたけ三升

右之通安右衛門六右衛門方より指上セ候事、

とあり、京都へ嫁いだ若くして夫を失い傷心の娘、お石（織田長頼の七女）へ、母の津川がお見舞いの飛脚として小者を遣わす際に、届けた品々の中に、黒大豆の表記がある。これにより既に宇陀では黒大豆が生産されていたことがわかる。

豆類の栽培は、農家の畑地所有率が高いので、畑地での栽培が多く、傾斜畑の栽培が多いので機械化が進まず、手作業による小規模栽培が多い。また、連作ができないため、年ごとに栽培する場所が変わる。

枝豆として収穫する場合は10月中旬頃となる。大豆として収穫する場合は12月頃、乾燥のためハサ掛けした様子を見ることができる。

これまでの間、在来種を育ててきたが、平成16年（2004）に、大宇陀町と姉妹都市である柏原町より、粒が大きく育つ「丹波種」の種が贈られ、現在はこの「丹波種」の黒大豆が主に栽培されている。農業協同組合の黒大豆小豆生産部会に加入している農家が73軒で（令和2年（2020）年11月時点）組合に未加入でも黒大豆や小豆を栽培している農家もある。出荷用の黒大豆については、「丹波



黒大豆



栽培中の黒大豆



黒大豆 さやから外す作業

種」が多いが、農協に属さない農家では在来の黒大豆を自家用で使う分として、引き続き栽培しているとみられ、実際にはより多くの農家が黒大豆の栽培に携わっている。

(2) 建造物

【野依白山神社】(豆焼き神事の舞台)

5-1 (2) 建造物を参照。

(3) 活動

【豆焼き神事】

黒大豆に絡んで、宇陀では大宇陀野依の白山神社で豆焼き神事が残る。煎った黒大豆を炭火で焼き、その焼け具合の様子から一年間の天気を占い、農作業の目安とする行事である。

大宇陀野依の白山神社で行われるこの行事は、『大宇陀町史』(昭和34年(1959))に「2月1日は二ノ正月といって、(中略)年越しには年男が黒豆を煎り、まず氏神へ供えて豆撒きをし、家族の者は年の数だけの豆を食べ、それで年をとったという。(中略)この晩に野依では神社でマメヤキとて、その年の天候を占う」とある。

現在は2月3日の夜と開催日が固定されており、宵の口から氏子が三々五々集まってくる。手には自宅で煎った黒大豆を包んだ半紙を持っており、野依白山神社本殿に置かれた三宝に豆を供えてお参りしたあと、三宝から豆をひと掴み取り、持ち帰る。

19時30分から神社の役員による祭典で般若心経を唱え、お供えの黒大豆で満ちた三宝をもって社務所へ移動し、煎り黒豆を12個選んで炭火で焼く。(閏年には13個置いて焼いていたが、現在は閏年でも12個。)焼けるまでに2～3時間ほどの時間を要するため、



煎り豆を火鉢で焼く



焼け具合を判定中



判定した焼け具合を清書する



区長による説明



令和2年天気予報

図は焼け残りが黒で雨を表し、燃え尽きて白い部分は晴れを表す。1 個の○がひと月分の天気の変り方を示し、区長が全員に対して解説をする。「令和 2 年（2020）は 10 月半ばから雨が続くので、稲刈りは早めに済ませましょう。」と農作業に関する部分は皆熱心に聞き入り「5 月上旬は雨…、オンダは雨かもしれません」というと、会場内から残念がる声が広がった。

山の合間のわずかな農地や斜面を利用して作られる黒大豆。各家庭で行われる節分の行事に加えて、大字の人が今年とれた黒大豆を持ち寄り野依白山神社で繰り広げる豆焼き神事等、黒大豆を使った伝統行事が現在も受け継がれ、良好な農村景観の中で黒大豆を育てる風景とともに歴史的風致を形成している。



6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼 行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

山間部である宇陀は、農地が少ないことから、農閑期には山へ入って柴刈りや炭焼き、下草刈りや枝打ちなどの山仕事をして生計を立てている農家が多くみられた。『田原村明細書上帳』（田原・片岡彦左衛門氏文書、明治4年（1871））には「産業 柴割木山稼」とあり、『大和国町村誌集』（川井景一編、明治24年（1891））では、半坂・内原・西山・本郷・宮奥など集落内に山を持つ多くの大字で物産の欄に「薪」「炭」と記されている。

また、厳冬で霧が発生しやすいという気候風土であることから、良質な木材を産出できる環境にある。『風俗志料』（大正4年（1915）/神戸村）の「三林業」には、種子の取り方、植付前の準備、植林方法と適切な時期、下刈りや間伐枝打ちの方法から伐採・運搬方法まできめ細かい解説が紹介されており、神戸村（現在の大宇陀宮奥・関戸・下宮奥・大東・黒木・本郷・中庄・西山・迫間・拾生・春日・小附・岩室・芝生・嬉河原・半坂・馬取柿・麻生田・内原・口今井・下竹・野依・平尾・五津を含む区域）では農業の戸数六五六戸ある中で、山林業に携わる戸数は「専業ナシ兼業二〇〇戸」とあり、三割の農家が山林業に関わっていた。

間伐材はシイタケ栽培の「ほだ木（菌を打ち込むための木）」として使うほか、薪にされた。山仕事の際に入手した柴や薪は、台所での煮炊きや風呂の湯を沸かすために使っていた。昔の風呂は薪で沸かすものしかなかったが、ガスや灯油、電気などの選択肢が広がった現在でも、燃料を入手しやすい土地柄のためか、薪でお風呂を沸かす家庭が多く残っている。宵の口には、薪で風呂を沸かす家から細く煙があがり、周辺に木の燃える匂いが漂う。

(2) 建造物

【大山祇神社 石碑】

古市場の旧宇太小学校の南向かいに小高い丘があり、その隅にしめ縄を巻いた一本の大木が立っている。これを御神木とした神社で、勧請した時期は不明だが昭和 43 年 (1968) 8 月に、奉賛講が建立した石碑がある。御神木の前になだらかに傾斜した広場があり、木製の鳥居が建てられている。

毎年 12 月 7 日に鳥居の前にて「山の神」を行う。



石碑の裏面

【行者堂】

木造平屋建、切妻造、棧瓦葺。小原の東端にある小高い山の頂に、役行者の石像と覆い屋が建っており、地域の人はこれを行者堂と呼んでいる。

毎年 1 月 7 日に行者堂の周囲で「山の神」を行う。



行者堂外観

【小原 八幡神社】

小原の西端にある小高い山の頂にある神社。来歴は不明だが、石段の踊り場に置かれた手水の側面に、大正 12 年 (1923) に奉納したとある。長い石段を登って境内に上がると、視界が開けて集落全体を見渡せる。本殿、社務所が並んでおり、その脇を通過して御神木のところへ向かう。



小原八幡神社の手水

(3) 活動

【山の神（古市場）】

菟田野古市場の山の神は、現在木材関係業者が主体となって行われている。旧宇太小学校校舎の南にある大山祇神社が会場となる。祭典の日に近い日曜日に、銘木業者の土場に集まり新しいしめ縄を作り、しめ縄の掛け替えを行ったあと、12月7日の朝、祭典が開催される。

令和2年度の準備は、12月5日に森庄銘木の土場で行われた。藁を叩いて柔らかくしたのち、8m程度の長さになるまで縄をなう。中央部は気持ち太目に作り、正面に房を3つバランスよく配して完成させる。鳥居につけるしめ縄も作る。

完成した縄を持って大山祇神社へ移動し、御神木に巻いてある古い縄を外して新しい縄にかけかえる。縄が巻けたら、縄に紙垂をつける。外した縄は鳥居の外に積み、祭典のときに燃やして暖をとる。

12月7日の朝、関係者が御神木の元に集まったところで、祭典が始まる。室生のようにカギヒキ⁴¹はなく、海のもの（しらす干し・鯖）と山の物（みかん・大根・水菜・サツマイモ）と酒、米を供え、参加者が順番に玉ぐし奉納をしてその場で直会をする。個人的にオリカケダル（「わらづと」という）という篠竹で作ったお供えの入れ物に、酒と肴を供えている人もいる。

古市場の山の神は、『菟田野町史』（昭和43年（1968）編集代表者 池田末則）に、「十二月七日は古市場と松井」と記述があり、このころには活動があったことがうかがえる。



しめ縄準備風景



縄の掛け替え

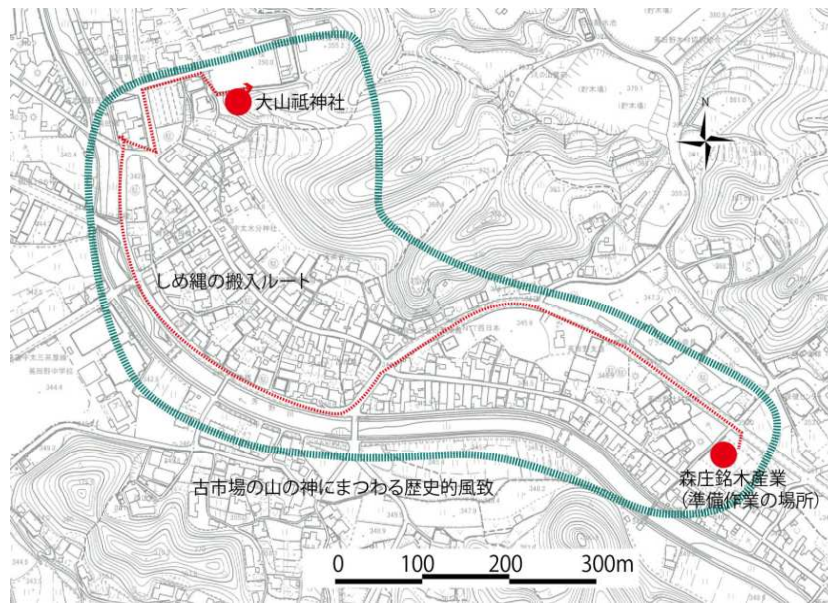


祭典の様子



オリカケダル（わらづと）

⁴¹御神木の枝に、かぎ型の小枝を掛け、何度か引く動作をすること。枝を引く際に、「西の国のイートワタ、東の国のゼーニカネ、ひっぱって、ウチのクラヘドッサリコ」と唄う地域もある。



山の神（古市場）にまつわる歴史的風致の図

【山の神（小原）】

室生小原の山の神は、集落の中央を南北に流れる川を境に東西に分かれて行っている。東側は行者堂の前で、西側は八幡神社の西にある大きな木のそばで行われる。

朝 7 時過ぎに各世帯からお供えとカギヒキの棒を持って、男性が集まってくる。木の根元にはお盆に入れたお供え（小判型の餅、干し柿）を置き、木の枝に棒を引っかけて何度か引いて、手を合わせる。東側では、カギヒキをした後に、枝の先端に紙垂とみかんをつける。持参した藁束に火をつけ、暖をとりながら集まった人で談話をする。

焚火が尽きるころ、お供えを下げて解散となるが、東側のカギヒキの棒についてあるみかんはそのまま外さずに置いておく。（学校帰りの子どもたちのおやつになる。）

『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966））に山の神の記事があり、当時から行われている行事であることがわかる。



西側の山の神



御神木



カギヒキをする



小原の山の神にまつわる歴史的風致



東側 行者堂前のお供え



ミカンを吊るす

【磨き丸太・銘木等の生産】

宇陀は霧が多く、磨き丸太用の杉を育てる環境に適している。本場は京都の北山だが、そこで学んで吉野・宇陀でも取り組むようになったと伝わる。

『銘木大観』（昭和30年（1955）/北尾春道 著）の広告欄に、宇太町古市場に所在する三共商会と、銘木銘竹業者案内に森本庄作商店という銘木屋が掲載されていたことから、このころには生産販売が行われていたことがわかる。

現在、床柱用の磨き丸太の生産は、11月～3月の寒い時期に行われる。気温が10度以下になってから始め、3月は15度になるころまで作業を行っている。

広い土場に、伐採した杉の丸太を持ち込み、高圧洗浄機で皮を剥く。（昔はヘラを使って剥き、砂で磨いた。）そのあと、チェーンソーを使って背割りをして、ヒビ割れが表面に出ないように加工する。そして日当たりのいい場所に立てかけて飴色になるまで天日に当てる。昔は、又首状に組んで、大量の磨き丸太を干していた。現在は作業所の横に一列に立てかけ、天日干しを行っている。背割り作業も天日干しも、道路脇の広い場所で行っているため、11月に入ると作業風景を見ることができる。

4月～5月にかけては、「海布^{かいふ}」という磨き丸太（垂木やテントの棒に使う）を間伐材で作る。

6月には錆丸太を檜、ヒバで作る。山で木を倒し、その場で皮を剥いて雨に濡らしておく。カビなどが模様を作るので、天気を読み、雨が降る2日前に山へ行き作業をする。

7月は杉皮の生産をする。土用の間に樹齢70～80年の杉の皮を山で剥き、その場に積み発酵させる。こうして作られた杉皮は撥水効果が期待でき、外壁や水回り、茶室等で需要がある。かつては屋根材としても使われた。



『木材大観』広告欄
(森庄銘木提供)



又首状に組んだ磨き丸太
(森庄銘木提供)



高圧洗浄機で皮を剥く



チェーンソーで背割り



管理前の森



林道をつける

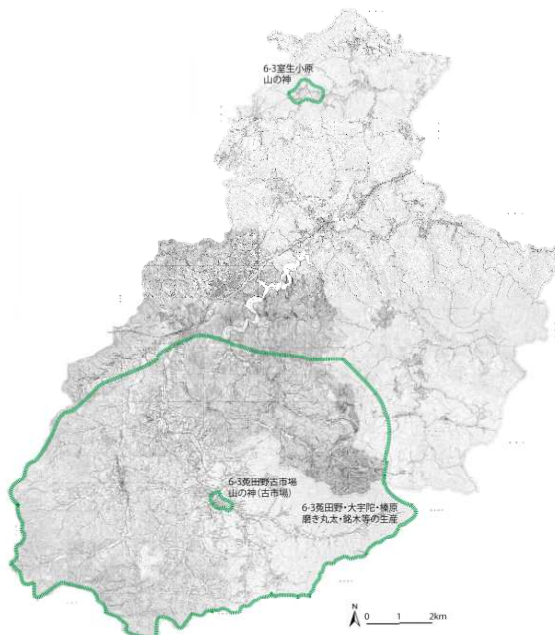


手入れされた森

(4) まとめ

山での仕事は、少しの油断で大怪我に繋がるような危険を伴う仕事である。また、天候の良し悪しが製品の仕上がりに影響を及ぼすため、自分たちの努力だけではまならない部分がある。

12月～1月にかけて、山の神へお参りをする風習は宇陀市一円にあり、神社境内に合祀されたものや自宅裏に祀るものもあるが、大半は山へ入り、祠の前や御神木に向かい、山の中で祈りを捧げている。長い時間を経ても変わらず続く銘木等の生産や山の神は、密に植樹された林や、田園風景の広がる集落等を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。

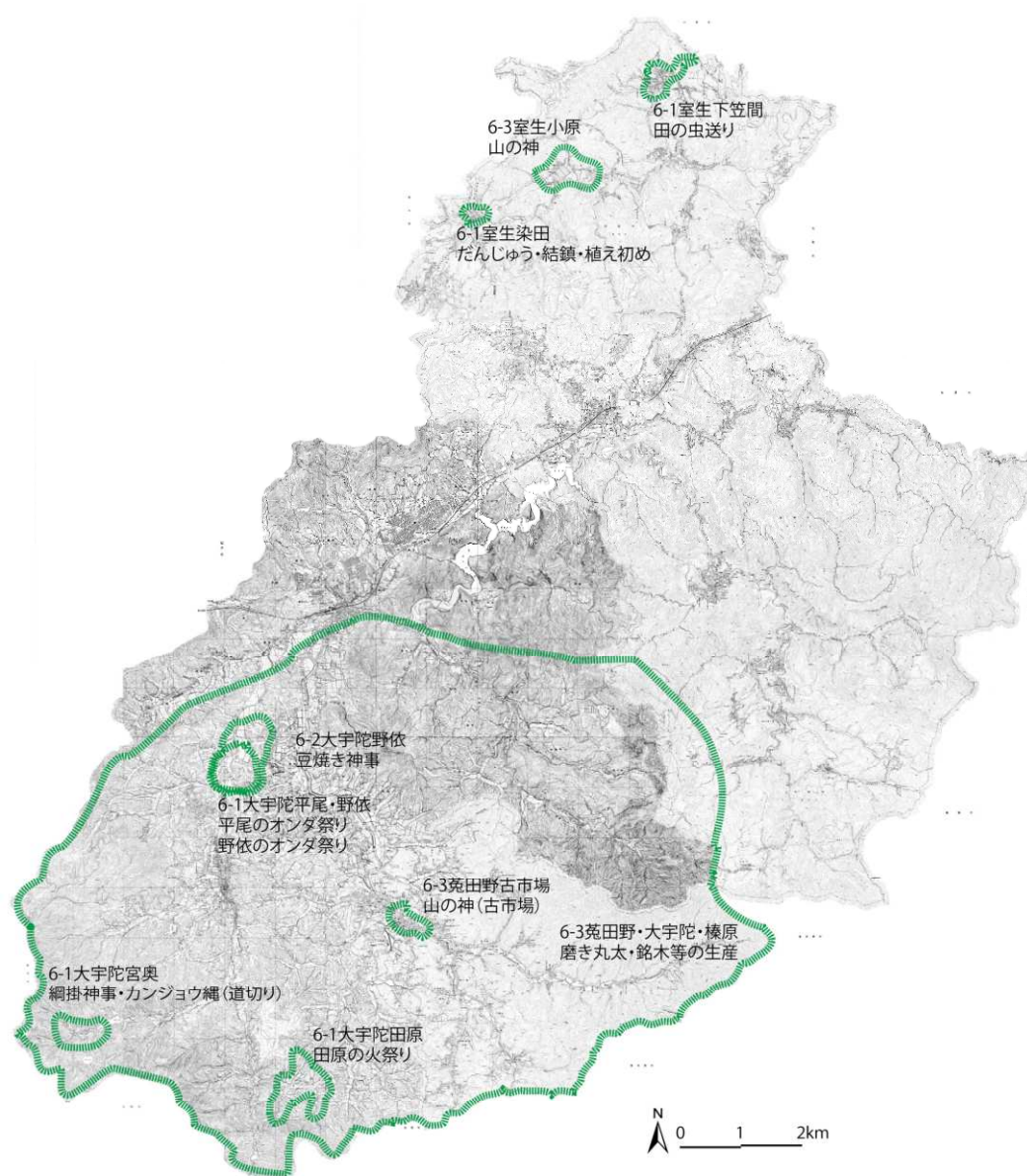


宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致の図

おわりに

山間部に位置する宇陀は、耕作面積が限られるほか、泥田が多く二毛作に向かないなどの厳しい条件の中で農産物を育ててきた。また、春から秋にかけては農作業に携わり、冬は山で炭を焼いて枝打ちをして材木を出す、という生活を行っていた。

正月から季節の区切り事に催される祭礼行事には、山や田の神への無病息災・五穀豊穡の感謝と祈りが捧げられてきた。昔ながらの農村風景を舞台に繰り広げられるこれらの活動が相まって、良好な歴史的風致を形成している。



宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム7 ダリアの生産

ダリアはキク科ダリア属の^{たねせいそうほんしょくぶつ}多年生草本植物⁴²である。メキシコ原産で、1789年にスペインのマドリッド王立植物園から欧州に広がる。

日本には天保13年（1842）にオランダから長崎に持ち込まれ、天竺牡丹と呼ばれた。長い時間をかけて品種改良が行われ、多種多様な品種が作り出されてきた⁴³。国内にいくつかダリアの産地ができ⁴⁴、昭和初期には家庭の庭先を飾る夏の花として普及した。

宇陀市におけるダリア栽培は、大正13年（1924）頃、県内種苗業者の委託を受けて球根生産を行ったのが始まりと言われる。寒暖の差が大きく冷涼な気候が幸いし、良質の球根や花が育った。

戦時中は食料増産のため一時ダリアの栽培が中断されたが、昭和22年（1947）から^{かき}花卉生産を再開、「榛原花卉組合」が生産に携わる。組合では、発足当初から^{つだしげぞう}津田重三氏（1908年～1972年）が指導役を務め、販路開拓や値段交渉のほか、生産者の畑を指導し品質向上に努めた。平成4年（1992）ダリア倉庫に保冷库を導入しそこで切り花用球根の貯蔵等を行い、高品質花卉の生産を進めた結果、ダリア球根は全国トップクラス（球根生産量日本一を誇る奈良県において、宇陀市の生産量はその半数を占める）、ダリア切り花においても関西有数の産地となった。

榛原花卉組合は、独自品種の育成にも力を注いでいるほか、メリクロン⁴⁵によるウイルスフリーの苗・球根づくりも手掛けており、現在でもダリア生産地として様々な挑戦を続けている。



ダリアの花



7月 球根植付状況



9月 球根用圃場の様子



切り花仕立て作業

⁴² 複数年にわたって生存する草のこと。

⁴³ 現在、300種類以上あり、17の花型に分類される。品種改良は人工授粉または虫媒（虫が受粉を行う）で行う。殆どが虫媒により行われ、品質が安定するまで3年ほどかかる。

⁴⁴ 日本では、宇陀市のほかに、秋田県秋田市、長野県下伊那郡、山形県置賜郡川西町、兵庫県宝塚市上佐曽利がダリアの産地として知られている。

⁴⁵ ウイルスに侵されていない茎頂部の細胞を培養し、無病苗を育てる技術。茎頂培養。